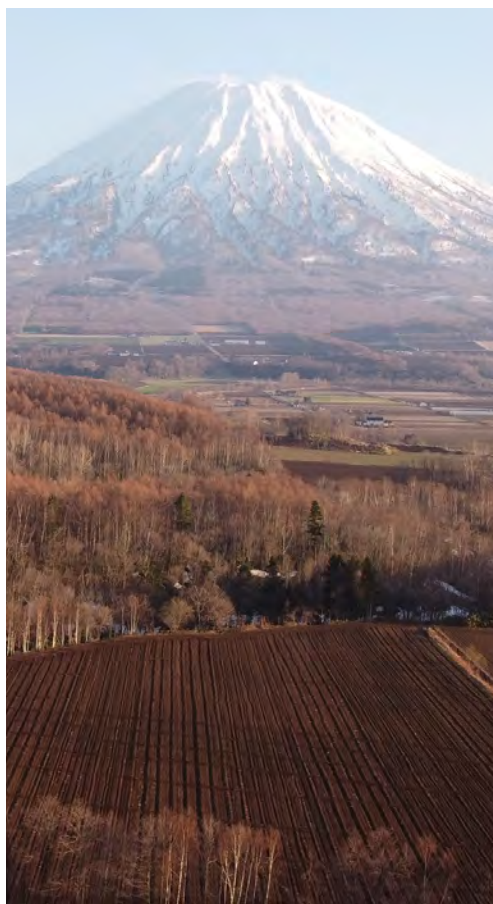




特集

ふるさとの風景



学び知り、未来に引き継いで

環境省自然公園指導員
矢吹 俊男さん
(福島県出身)

学芸員として町職員を務め、退職後の現在も町の歴史や文化・風土について学び伝え、環境省の自然公園指導員としても活動する矢吹俊男さんに「自然」と「人」、そして「まち」との関わり方についてお話を伺いました。

羊蹄山やニセコ連峰、尻別川などには、恵まれた自然に触れることを目的に、多くの人が訪れています。

私は自然公園指導員という立場から、たくさんの方が自然に親しむことは素晴らしいことだと思っています。しかし、見た目の美しさに気を取られ自然に近づきすぎてしまうことがあります。そして、その行為のほとんどに悪意はないものの、結果として自然を傷つけてしまうことに繋がります。

そのような場面に出会ったときに、人と自然の距離感についてしっかりと伝えることが私たちの役割だと思っています。コロナ禍で人と人とのソーシャルディスタンスが叫ばれています。が、自然を傷つけないための距離感も意識して親しみましょう。

まちは、人が自然を切り拓くことで発展させてきました。

私たちが自然を感じる田や畑の田園風景でさえ人の手によるもので、現在周りにある多くの

私たちの暮らす倶知安町は、羊蹄山が属する「支笏洞爺国立公園」とニセコアンヌプリを主峰としたニセコ連峰が属する「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」に囲まれた、日本でも有数の自然資源を誇る町です。

日常生活の中で、当たり前のようにするこの自然は、私たちの暮らしを支えつつ、時代とともに変遷を遂げ、現在も、観光や農業はもちろん、さまざまな恩恵を与えています。

今後もスキー場周辺などの開発や、新幹線・高速道路の開業に向けた準備などが進む中、私たちは町の未来に向けて、それらの自然とどのように付き合っていくべきなのでしょう。

7月21日は「自然公園の日」です。広報7月号ではこの雄大な自然資源とともに私たちの暮らしからなる町の景観について特集します。

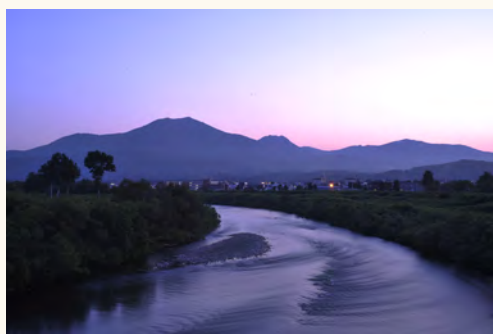
自然景観はもとの形を変えながら今に至ります。

倶知安町では今後もスキー場周辺などの開発や、新幹線の開業など町を取り巻く環境の変化は避けられません。

そのような中でも、自然を残そうとする気持ちを持ちながら育てていくという意識が大切です。自然は例え傷ついても残してあげるにより、自らの力で傷を治そうとします。変化は

止めようがありませんが、形を変えながら未来に繋げていく努力をすることで、町への誇りや愛着を持ち続けるられるのではないのでしょうか。

まちづくりを進めるにあたって、自然を活かし引き継いでいくために、周辺の自然と町の成り立ちについて、改めて学び知り、自然と町のあり方について、未来を見据えながら考えることが大切です。



▲尻別川とニセコ連峰

羊蹄山（支笏洞爺国立公園）

秀峰羊蹄山が属する「支笏洞爺国立公園」は、自然公園法の制定に伴い廃止された国立公園法において昭和24年に指定され、昨年70年を迎えました。

ニセコ連峰（ニセコ積丹小樽海岸国定公園）

「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」は、国立公園法のもと昭和25年にニセコ地域を主とした道立公園に指定され、昭和38年に今とほぼ同じ区域が国定公園として指定されました。

活かして伸ばすまちづくりを



SPROUT代表
峠ヶ 孝高さん（千葉県出身）

町の顔ともいえる駅前通りの一角でカフェを経営、昨年は隣接する場所に複合商業施設を開業した峠ヶ孝高さんに、ご自身がこれまでの経験により培ってきたお店づくり・空間づくりの考え方や、倶知安の景観づくりについて話を伺いました。

もともとアウトドアスポーツが好きで、学生時代にはバックパッカーとして渡米し、好きな自然が身近にある環境で暮らしたいと考え倶知安町に移住。自らのそれまでの経験を体現できる場所として数年後にSPROUT（スプラウト）をオープンしました。

オープンから10年、この場所ですぐに人との繋がりが広がっていく中で、この地域の自然環境に魅せられて訪れる人、暮らす人の拠点になるような場所を作れないかと考え始め、昨年12月に複合商業施設Camp & Go（キャンプアンドゴー）を開業し、これまでのお客様に加え、施設の各テナントのオーナーや、そこを訪れるお客さんらが交流できる空間ができました。

新しい展開を考えるときには、旅に出て雄大な自然に触れることや、旅先の都市が持つ雰囲気を感じることを大切にしていきます。アメリカを旅した際のシアトル（ワシントン州）の多様なカフェのスタイルなど、目で見て感じたものや、ヨセミテ国立公園（カリフォルニア州）のキャンプ場で出会った人々から受けた刺激は、今のお店や施設の空間づくりに大きな影響を与えています。

これまでに私が訪れた町には、倶知安と同様に国内外から多くの人がその場所に惹かれ、訪れています。地域の魅力とは、豊かな自然と、その中で調和をとって暮らす人だと思っています。

その人たちが、今ある環境の中で楽しく暮らす姿が、町をより魅力的に見せているのだと思います。

この町にはたくさんの魅力があります。みんなが今あるものを大切にしながら、活かして伸ばしていくことで、倶知安らしい町並みが生まれるのかなと感じています。

町は、今後2カ年をかけて景観計画の策定を進める予定で、既に景観に関するアンケート調査を実施しています。

今後は町民や学識者からなる検討会議を設置し、計画の策定に際してはパブリックコメントの実施により皆さんの意見などを聞き取る予定をしています。

矢吹俊男さんは、この取材の中で「町の景観は、町に関わる人それぞれにいろいろな考えがあるもの。その中でその土地に見合ったものをみんなで考え、子どもたちのために、育てていく事が大切だ」と話していました。

7月21日は「自然公園の日」。身近な自然との付き合い方や、私たちの暮らしとまちの未来のあり方について考えてみてはいかがでしょうか。

景観計画について詳しくは
図まちづくり新幹線課景観室
景観係 ☎ 56—8012

次の世代に 引き継ぐために

景観計画の策定に向けて

倶知安町は、「支笏洞爺国立公園」と「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」、それぞれに属する秀峰羊蹄山やニセコ連峰、清流尻別川などの恵まれた自然環境を、次の世代にしっかりと引き継ぐことが大切であると考えており、この町に関わる全ての人が誇りと愛着を持ち、住み続けたいと思える景観まちづくりを進めるため、「景観行政団体」への移行に向けた準備と、景観法に基づく「景観計画」の策定や景観ルールなどの見直しを進めます。

「景観」とは

山並みなどの自然や、建築物・工作物など、町並みを形成する「風景」や「景色」を意味し、その土地の風土や風習など、町民の暮らしが反映されて目に見える形となっているものです。

良好な景観は、町民の生活に潤いを与え、地域の魅力の向上につながります。

「景観行政団体」とは

景観法に基づく「景観計画」を整備し、景観行政を主体的に取り組む団体のことを指します。倶知安町では現在、北海道の景観計画による基準で、道が景観行政を推進していますが、町へ景観行政団体を移行することで、独自にルールを定めるなど、倶知安らしい景観づくりが可能になります。

「景観計画」とは

景観法に基づき、「景観行政団体」が定めることができる良好な景観の形成に関する計画です。

「景観計画」を策定することで、建築物や工作物などの建設に関するルールづくりや、町のシンボルとなる建造物や樹木の指定など、倶知安らしい良好な景観を保全・推進する助けになります。

倶知安の「景観」

ひとことで倶知安町の「景観」といっても、そこには雄大な自然景観の他、住宅地や駅周辺の商業地、スキー場周辺のリゾートエリア、田や畑の広がる田園風景などさまざまな要素があり、人によりその見え方も異なります。羊蹄山やニセコ連峰、尻別川など、町を取り囲む美しい自然環境は、倶知安町民共通の景観要素なのかもしれません。

